

たどつこう

多度津港（県管理地方港湾）

多度津港は香川県中部、JR予讃本線と土讃本線の分岐する町、多度津町に位置し、鉄道とともに人流、物流の拠点として、また、生産の拠点として重要な役割を果たしています。

本港は江戸時代、第5代多度津藩領主、京極高塚(たかてる)の時代、藩の財政を改善するため当時栄えていた丸亀港よりもっと大きな船の入れる港を築こうと、家老自らが陣頭指揮をして湛甫を築いたのが商港としての起源であり、港の完成と同時に全国から金毘羅船、北前船が集まる金毘羅参詣の要地および物資の集散地となり、港は大いに賑わいました。

明治に入っては背後に本県初の鉄道である讃岐鉄道が開通し、また港には大型商船も頻繁に出入りするようになり、多度津港は四国の交通拠点として、ますますその重要性を増していきました。

戦後は急激な工業化の進展に対応して約190haの臨海工業用地の造成を昭和49年に完成し、合わせて大型港湾施設の整備拡充を図りました。

現在ではここに、造船、石油、金属、機械等の各種企業が立地し、臨海工業地域を形成するほか、昭和57年には世界一の規模を誇る原子力工学試験センターも立地し、産業、学術研究の拠点として注目を浴び、また、昭和60年に策定された「香川田園テクノポリス開発計画」の指定地域にも組み入れられる等、今後は先端産業と流通機能が組み合わされた新しい総合港湾としての発展が期待されています。

